

# 黒毛和種肥育牛にみられた化膿性髄膜脳脊髄炎の一例

東播基幹家畜診療所

○是枝明博 井上雅介 廣瀬春菜 三谷 睦 中村善彦 山崎 肇

県内産黒毛和種肥育農場において、マイコプラズマ感染を疑う中耳炎にて治療中の牛が、神経症状を呈し死亡した。病性鑑定の結果、脳底部に化膿性病変が認められ、化膿性髄膜脳脊髄炎と診断したので報告する。

## 材料および方法

症例は2014年7月31日生の去勢牛、県内産の黒毛和種但馬牛を350頭飼養する農場に2015年4月18日県内A市場より262日齢で導入。4月22日に除角とワクチン接種（牛呼吸器5種混合生ワクチン、*Histophilus somni*・*Pasteurella multocida*・*Mannheimia haemolytica*3種混合不活化ワクチン）を実施。2015年5月6日右耳介下垂にて求診、初診時、体温40.7℃、右耳介下垂、耳漏認め5月25日まで治療にて症状回復し経過観察。6月10日体温39.0℃、中耳炎再発のため治療するも6月19日（第45病日）に突然転倒し、起立不能呈し、翌日より、昏睡状態となり縮瞳・瞳孔の転位および遊泳運動などの神経症状を呈し、6月24日（第50病日）死亡したため病性鑑定を実施。

## 結果

血液生化学検査（6月19日）ではCKの上昇（580U/L）、WBCの減少（3,800/ $\mu$ L）が認められ、その他項目に著変は認められなかった。

剖検所見では脳底部の下垂体窩から後頭蓋窩には4×4cmの膿塊が認められた。第IV脳室、頸髄周辺にはフィブリンが付着し、大脳側脳室の拡張が認められた。右鼓室の粘膜は赤色を呈していたが膿の貯留等の異常は認められなかった。肺炎病変はなく、その他の主要臓器に著変は見られなかった。

病理組織検査では髄膜においてグラム陽性球菌が見られ、線維素が析出し、マクロファージ、好中球が浸潤していた。

細菌検査では、*Mycoplasma bovis*のPCR検査において肺、気管スワブ、大脳、小脳、脳底部膿瘍および脳脊髄液で陽性。鼓室スワブは陰性であった。また、脳底部膿瘍、脳脊髄液からレンサ球菌（*Streptococcus mitis*）を分離した。

## まとめ

本症例は病性鑑定の結果、化膿性髄膜脳脊髄炎と診断した。今回の神経症状は、大脳の化膿性病変が見られなかったことから、脳底部膿瘍による圧迫に起因したと示唆された。脳底部の化膿性病変は *Streptococcus mitis*, *M. bovis*によるものと考えられるが、侵入経路については特定できなかった。